青山国際政経論集 99 号，2017 年 11 月

研究ノート

善と悪のごった煮
――『終わりよければすべてよし』雑感

狩　野　良　規*

BBC シェイクスピア・シリーズから 1 本紹介しておきたい。BBC が 1978 年から 85 年にかけて，シェイクスピアの全 37 作品を制作・放映したテレビ・シリーズ。予算不足と，テレビ・スタジオのセット撮影の貧弱さと，それからアメリカ側のスポンサーから出た，教育の一助として利用すべく，舞台をシェイクスピアの生きたエリザベス朝ないしは作品の背景となった歴史上の時代に設定せよとの縛り。

できたテレビ・ドラマはなるほど教育的で教科書的，ロンドンのかっ飛んだ芝居に慣れたイギリス人からは当然そっぽを向かれた。しかし，沙翁（シェイクスピア）劇全作を取り上げたインパクトは大きく，またビデオ開発期と重なり，単にテレビで放映されるだけでなく，後世に残すシェイクスピア劇はいかにあるべきかが議論を呼んだ。結果，沙翁研究の分野では最も権威ある学術誌のひとつ『シェイクスピア・サーヴェイ』（*Shakespeare Survey*，ケンブリッジ大学出版会）が 1987 年（第 39 巻）にシェイクスピア映画の特集を組み，その後の沙翁劇映像化研究興隆の端緒を開いた[1)]。

*　青山学院大学国際政治経済学部教授

1）　今やシェイクスピアの国際学会では，必ずといっていいほど沙翁劇映像化に関するセッションが設けられるようになったが，日本では不思議なほどこの手の議論が起こらない。いったい文学研究者は，舞台で演じられるシェイクスピアを文学として，詩として鑑賞するシェイクスピアよりも一段下にみる傾向がないだろうか。そして，演劇としてシェイクスピアをみる人は，映像はしょせん生の舞台の魅力にはかなわないと考えているのではないか。だが，時代に抗うことはできないのであって……

© Aoyama Gakuin University, Society of International Politics, Economics and Communication, 2017

そんな映像による最初のシェイクスピア全集，「テレビのファースト・フォリオ[2)]」たる BBC シリーズから選んだのは，テレビの小さな画面にすっぽり収まって違和感のなかった地味な小品『終わりよければすべてよし』（1980 年）である。演出はイライジャ・モシンスキー。

名医の娘ヘレナは亡き父から教わった治療法によってフランス国王の難病を治し，その褒美としてロシリオン伯バートラムとの結婚を許されるが，肝心のバートラムは気が進まない。彼は「私の指輪を手に入れ，私の子供を身ごもれば，私を夫と呼ばせよう」との置き手紙を残して，フィレンツェに逃げてしまう。後を追ったヘレナは，バートラムが愛していたダイアナと入れ替わって深夜の密会に成功，彼の差し出した条件を満たし，バートラムもついにヘレナを愛することを誓う。

最後は題名どおりめでたしめでたしに終わるのだが，終わりだけよければすべてよいというものでもなかろう。バートラムの改心はあまりにも唐突で，二人は結婚しても長続きはしないだろうなどと余計な心配をしたくなる。この戯曲の種本はボッカチオの『デカメロン』の中にある話だが，原話の方はカラッと明るい語り口の昔話で，奇想天外な結末にもべつに違和感は感じない。けれどもシェイクスピアの方は妙にリアルで深刻なところがあり，どう一貫性のある解釈をほどこすか，そこいらへんが「問題劇」と称されるゆえんであろう。

BBC 版はなにより役者がうまい。バートラムの母親，ロシリオン伯爵夫人を演じるのは，シーリア・ジョンソンである。家族持ちの中年男女の恋愛を描いた『逢びき』（1945 年，イギリス映画），切なかったなあ。そんなに美人ではない，しかしイギリス人が「演技力さえあれば，女優は美しく見える」と宣（のたま）う，そのとおりの演技派の名優[3)]。それに，まあ，婆さんになってしまえば，外見

2）　Susan Willis, *The BBC Shakespeare Plays: Making the Televised Canon*, The University of North Carolina Press, 1991, p. xi. BBC シリーズの制作現場に自ら立ち会って記述した貴重な記録。

3）　この話をするのはひさしぶりだ。以前に，イギリスの女優には美人はいないとずいぶん書き，書評でもそれを笑われたが，僕が不美人だと言った場合は，なのに主

なんてどうでもよくなるし。このテレビ番組が彼女の遺作とか。

伯爵夫人がパリに向かう息子に，「すべての人間を愛し，でも信頼するのは少数にとどめよ」，「口数が少ないとは非難されても，よくしゃべると責められぬよう」（1 幕 1 場）。いい忠言だ。

パリで瀕死の病に苦しむ国王役は，これも名優ドナルド・シンデン。老優たちがきっちりと作品の重石になっている。フランス王がベッドに伏せ，貴族たちが心配そうに彼を見守るカットは，光と影の画家レンブラントを意識した映像である。背景を暗くし，人物に照明をあててフワッと浮き立たせる。シェイクスピアの生きていた時代に舞台を設定せよとのお達し，ならばと近世絵画を援用した（これなら，予算不足の背景セットも隠せるし[4]）。

モシンスキーの「絵画的」に画像を処理する演出方法には，プロデューサーのジョナサン・ミラー[5]の知的アイデアが反映されている。ミラーは演出をピーター・ブルック，ジョン・デクスター，ウィリアム・ガスキル，イングマール・ベルイマンらに託そうとしたが，そんな大物たちが乗ってくる企画のはずはなく[6]。と，そうね，『終わりよければすべてよし』は予算をたっぷりつけて，スポンサーからの条件も外してベルイマンに演出させたら，僕の大好きな『秋のソナタ』（1978 年，スウェーデン映画）に伍（ご）する室内劇の傑作になったかもしれない。

ヒロインのヘレナ（アンジェラ・ダウン）。貧しい医者の娘，身分は低いが，伯爵夫人によってりっぱな教育を授けられている。フランス王は「美徳が彼女

役を張っているのはすごい，かの国の舞台は正真正銘，演技力勝負だという誉めことばである。お間違いのなきよう。

4） レンブラントと同じ，17 世紀のネーデルラント（オランダ）の画家ヨハネス・フェルメールのタッチもそこここに見受けられる。お探しあれ。

5） ジョナサン・ミラーは医者にして大物演出家という変わり種。我（が）の強いローレンス・オリヴィエを相手に演出するのはなかなかの難業だが，当時ナショナル・シアターの総監督だったオリヴィエを御して，彼に名演と謳われるシャイロックを演じさせた『ヴェニスの商人』（NT，1970 年）なんて，実にお見事。稽古場ではダメ出しの雨あられだったとか。BBC 沙翁シリーズでは 12 作をプロデュース，しかし演出家や俳優の雇用は思うに任せず，結局自ら 6 本を演出した。同シリーズについては，制作の過程を知れば知るほど批判する筆が鈍る。

6） Susan Willis, *op. cit.*, p. 24.

の持参金だ」と言うが，決して美徳の固まりではない。もろもろの計算ができる。だが，計算高くは見えない。謙虚さと意志の強さを合わせ持ち，企(たくら)みごとができる。節度はあるが粘り強く，惚れた男を執拗に追いかける。人の心を引きつけることば遣いができる。人生に対して積極的，前向き。でも，私が，私が，というタイプではない。つまりはかわいいだけではない，自分の考えをしっかりと持った賢い娘なのだ。

そして BBC 版では――最初は遠目，後ろ姿，それからシルエットで映したり。顔がよく見えない。ちょっと視聴者をじらす。しかし，やがてアップになると――美人にはほとんどお目にかかれないイギリスの女優の中でも，平均を下まわる見目形。おいおい，婆さんならともかく，若きヒロインだぞ。演技力のある役者だが，それでも美しくは見えない！ 笑えるのである。

一方のバートラムはどうか。伯爵夫人に甘やかされて育てられたのだろう，馬鹿息子である。ことばが内心を正直に表さない。チャラ男(お)。すこぶる評判の悪い人物である。俳優にとってもやり損な役だ。軽佻浮薄で，自業自得とはいいながら女性陣に一杯食わされ，終幕では無理やり改心させられる。どこが終わりよければだ，バートラムにとっては踏んだり蹴ったりの幕切れである。

ところがそのつまらぬ男の役を端整な顔立ちにして演技力抜群のイアン・チャールスンに演じさせた。彼が国際的に知られたのは，『炎のランナー』（1981 年，イギリス映画）で神の栄光を称えるために走るピューリタンのオリンピック選手エリック・リデルに，また『ガンジー』（1982 年，イギリス・インド合作映画）でガンジーと行動を共にしながらしだいに成長していく牧師に扮してからだ。その姿，実に清々しく，主役を任されても脇にまわっても，過不足なく役柄を演じきる。僕がぞっこん惚れ込んだ俳優である[7)]。

が，彼は 2 本のアカデミー賞受賞映画で有名になる前から，イギリスの舞台

7） 僕は研究休暇をもらって 1991 年にイギリスへ渡ると，すぐにイアン・チャールスンの出演している芝居を探した。だが，彼はその前年，40 歳の若さで他界していた。彼を一度，舞台で見たかったなあ。『炎のランナー』と『ガンジー』およびイアン・チャールスンの演技については，拙著『スクリーンの中に英国が見える』（国書刊行会，2005 年）を参照されたい。

では伸び盛りの役者として期待されていた。その売り出し中の俳優を軽薄な放蕩息子役に配した。2 幕 3 場，バートラムはヘレナとの結婚をかたくなに断る。よっぽど嫌なよう。国王の命令で渋々承諾しても，すぐにイタリアの戦場へ逃げようとする。ヘレナはせめて別れのキスをと遠慮がちに求めるが，それも拒否する。残酷な男め。ヘレナがとってもかわいそう。けれども，ため息をつくバートラムをアップで捉えた映像を見れば，それがなんとも格好よく，洗練された容姿ときている。

さて，観客は才気煥発な不美人と眉目秀麗（びもくしゅうれい）な馬鹿男と，どちらに共感するか。

バートラムは戦争に行ったフィレンツェでダイアナを誘惑しようとする。4 幕 2 場，夜の暗い部屋で顔と顔を突き合わせて口説き口説かれる男女の姿は，二人の横顔をミディアムの長いワンカットでじっくりと映す。いや，このシーンだけでなく，人々の横顔が多い作品。人物たちが話し，考えをめぐらす様子を，ずっとミディアムないしはアップで捉える。カメラはめったに引かない。映画館の大画面ではなく，テレビの小さなスクリーンを意識した演出である。と同時にグローブ座の大衆ではなく，ジェームズ朝の知的な階級を観客層にしたであろうこの芝居の，ゆったりとした思索の劇という側面を的確に映像化している[8)]。

8） 人物たちの横顔のショットが多く，それは “考える劇” を視覚化するテクニックのひとつだと僕に最初に教えてくれたのは，シェイクスピア映像論の先駆者ロジャー・マンヴェルだった。NHK が 1980 年 11 月～1987 年 3 月に放送した BBC シェイクスピア・シリーズ全 37 篇には毎回，日本の一流どころのシェイクスピア学者が解説を加えていた。『終わりよければすべてよし』の回は，当時学習院大学教授だった荒井良雄さん，そして荒井さんとマンヴェル教授の対談も付されていた。上記はその折の話に基づいている。

ちなみに，荒井先生には僕の初めての単著『シェイクスピア・オン・スクリーン』（三修社，1996 年）の帯を書いていただいた。先生とはそれまで面識がなかったが，お願いすると 1 日で一気にゲラを読んで文面を送ってくださった。また，拙著をあまり誉めてくれるので怖くなり，渋谷のパブレストランでお話を伺うことにした。先生はメモも何も持たず，僕の本の批評をされる。酒も入っていたが，僕が途中から真顔で「メモを取らせてください」と言い，こちらが本気で聞く耳があると思ったのだろう，それこそ 2 時間以上の厳しいダメ出しが続いた。僕と意見の異なるところも多々あったが，実によく僕の生意気な処女作を読んでくださっていることがわかった。

イアン・チャールスンとともに，もうひとり僕の好きな俳優をクレジットで見つけた。ロバート・リンゼイである。BBC シリーズでは『から騒ぎ』のベネディック役，また『シンベリン』のヤーキモー役が印象に残る。だが，ここでは「フランス貴族 1」とな。そんなチョイ役になぜ彼を？ そもそもどこに出ていた？ 昔見た時には，完全に見落としていた。

NHK の放送からダビングしたビデオを何 10 年ぶりに見直してみると――いた，いた。フィレンツェ軍の陣営にいる名前も与えられていない貴族その 1。理由はすぐにわかった。4 幕 3 場の小さな場面だが，彼がなにげなくいいセリフを口にする。「人生は善と悪とを縒(よ)り合わせた糸で編んだ網だ。我々の美徳は過失によって鞭打たれなければ高慢になるし，罪悪は美徳によって慰められなければ絶望するだろう[9)]。」

そう，これが『終わりよければすべてよし』のテーマである。それを端役にさりげなく言わせているのがミソ。いったいハリウッド映画や邦画のエンタメ作品では，格好いいヒーローやヒロインがそれを決めゼリフのごとく語る。するとスター俳優を見にきた観客は胸がスカッとするのだが，作者のメッセージ自体は吹っ飛んでしまう。

一流の作品では，モチーフなるものは，深いところに目立たぬように埋め込まれている。

人間は善と悪のごった煮だ，善人と悪人はめったに分けられない，すべての人間に一理がある――と，シェイクスピアの人間観の原点は，どうやらそこい

『シェイクスピア・オン・スクリーン』を出版したころは，沙翁映画に関する先行研究といえば，荒井先生の訳されたロジャー・マンヴェル著『シェイクスピアと映画』（白水社，1974 年，原著 1971 年）くらいしかなかった。僕はマンヴェルの映画評以外はほとんど他人の批評を気にせず，シェイクスピア映画だけを自分の目で見て，書きたいように筆を運んだ。

他日，ボロボロになるまで読み込んだマンヴェルの本にサインを求めると，荒井先生は「こんなにきちんと読んでくれて」と嬉しそうな顔をされ，英語で短いことばとサインをしてくださった。神田のヒルトップホテルにて，1997 年 10 月 6 日と日付が入っている。

ここに思い出を記して，一昨年［2015 年］鬼籍に入った荒井良雄先生への感謝の意を捧げるしだいである。

9） *All's Well That Ends Well*, IV. iii. 67–70.

らへんにありそうだ。芝居は上手な俳優をどの登場人物に配するかによって，ガラリと変わることがある。それは単に舞台を盛り上げるためではなく，戯曲に内在するテーマに光を当てるためになされる場合もある。モシンスキーはイアン・チャールスンを起用してヘレナからドラ息子に観客の注目を微妙に移し，ロバート・リンゼイに沙翁の隠れた名句を語らせた。これ，「戯曲の精神」を照らす絶妙の配役と演出である。

また，ジメッと暗い喜劇によくしゃべるおどけ者がひとり。バートラムの家臣ペーローレスである。フォールスタッフに次ぐ人気者というのはやや持ち上げすぎであろうが，ローレンス・オリヴィエもこの口先ばかりの軽薄な男に扮して，バーナード・ショーを喜ばせたとか[10)]。ペーローレスはフランスの貴族たちの計略にはまり，敵軍に捕まったと思わされ目隠しをされると，命惜しさにしゃべる，しゃべる。味方の軍の情報も，貴族たちの悪口も，見境なく。そして目隠しを外されると，そこにはバートラムをはじめ見慣れた貴族たちが並んでいるという仕掛け。オリヴィエは人をいじめる役も楽しんだが，オセローやシャイロックやペーローレスなど，ボコボコにいじめられる役柄も嬉々として演じた。

だがこのお調子者のペーローレス，劇的機能からいえば，彼のご主人様の露払いだったことがほどなくわかる。終幕近くになると，バートラムがフランス王から指輪やダイアナの件を問い詰められて，口から出まかせ，よくもまあペラペラと言い逃れの文句を発する。ペーローレスを笑い者にしたバートラムが，今度は己のことばに真実が籠っていないことを露呈する。おっと，1 幕で伯爵夫人が「よくしゃべると責められぬよう」と息子を諭（さと）した忠告も響いてくるわけか。

シェイクスピアはしばしば多弁を笑い，また戒めた。『ハムレット』では大臣のポローニアスに長広舌をふるわせ，しかる後に「簡潔さこそは知恵の真髄」と後世に残る名ゼリフを吐かせた。こういう一句はそれにふさわしからぬ人物

10） 小田島雄志訳『終わりよければすべてよし』（白水 U ブックス，1983 年）巻末の蒲池美鶴による解説より。

に語らせると，笑いがとれる。もっとも，シェイクスピアの詩行こそは多弁の極致なのだけれど。

最終場では，フランス王が愚かな者たちをみな許す。ダイアナには，夫を自由に選べ，結婚の費用は自分が出すから，と。2 幕でヘレナに許可して災いの元ともなった，それと同じ過ちを犯している。全然賢くなっていない。国王もまた善と悪，長所と短所を合わせ持っているわけだ。

さて，この「許し」なるテーマ，シェイクスピアの初期から晩年まで，彼の作品の根底にずっと流れていると説く研究者もいる。しかし，いわゆる「四大悲劇」と並行して「問題劇」を書いていたころの沙翁はしどろもどろ，支離滅裂。ロマンス劇までいくと，一定の達観はあるのだが，どうもこの時期は心底から納得して人を許し，万事をめでたく収めていたようには思えない。

むしろシェイクスピアは，おとぎ話に己の毒を注入し，それを作品中で解毒できず，はては結びをつけるのを放棄している。ごった煮の人生をどう扱っていいのか持て余している。

BBC 版はテレビ番組ゆえ，フランス王が「機械じかけの神」よろしく許しまくって，後味のよいハッピーエンドの雰囲気を醸しているが，しかしスクリーンの向こう側には終わりが見えず，道半ばで立ち往生しているシェイクスピアの姿が，僕には想像されてならないのである。　（2017 年 7 月 脱稿）